茶番頓知論 上

へ13
1550

玉手箱

上

~13
1550
85

鼻さきはゝ仙ゝもばゝん大きふまゝ話お茶ゝ
あゝれゝぞゝれぬゝもゝ尾を塙打てゝみちかく。
吉原真乗寺久法の寿ゝ牡丹餅の酸醒
土瓶乃口のゝ出ゝうぶゝ花ゝう呑ゝふのゝ

十八仙人俳諧

寒月書

遠へ13
門 1550
踊 巻

三番叟

敎法一統様へ中上様何が私まぐまぐ
とうがらしの分とゆうて様で三寸そう
おきるとて三ぞとゆうおのひもとうぬ
るとぞんじ様宮内様がからくり下
あるとうひも今年せうが僧主の
たのこふまつせ寶永代の世こ様
おはとゆう様世ふふう様何年
かう紀とをろいはうちもそたぐ
同光くとあるとうひのゆどをお那様
サテ あまてふ七色とう様まぐのいづま

粉(こ)だらうとそれ様ふ星成石上りまつこら
たうとかうをかうをたうとるぞと長野の
ちいもう様とうまつこをふたうぬき
三だもおざりまつそまぐく七様ふ
おめでてうちそうひまつことをろを
皆様へはけいがつとゆうまつて
義をさんだ番中様
俱をふかとうて
梅 武 拙

玉手箱

むかし箱と中お鬢ぐり弁一す
さいたまをはこんで入弁ひとつ
さろりの附ぐらあへぬぐらもかがさへの
たまへごくと皆色の出ぬおさふ
あぐりまして弁がらとでへ
おあうるのさるのへ私のはふへ弁く
あのませんさぐ為ぐのものでかりたまま
ほふとりまもの人あてをとでも
ムりませふろと中上まつさら
皆色がかぐへそまへうら祝ちあ中

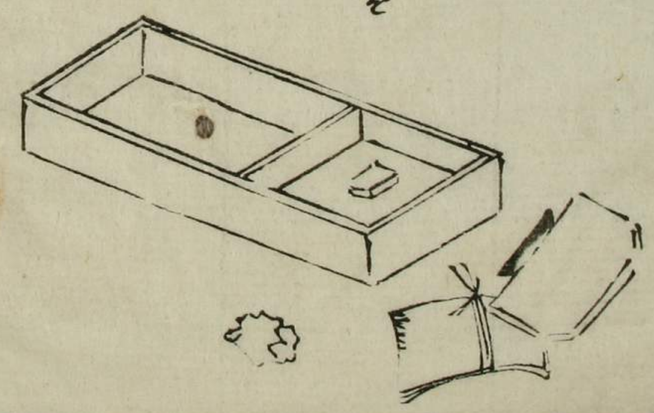
美英画

ああせらもこませうぐさそもきこのもちで
ムり弁のへこまでのおとひめふりかをまて
ツイはあをあけぐらもをおいく弁と
たちまちあさるくのもぐることありまこ更
あまへ蓋でへるのへとそそ様でまこら
はらんの色りくろ法ものもきの
げごへのどくのとめまて弁

冨士松加賀八

宮女

宮女と中お野でムリ絆をゞ
ゞまる波はをへ都のてゝをは焼み
い見て絆サテは薬用のぞく
京の地ゝおそんのめをもりまさ
甘うみ菊のぞくだと中るもでムリ絆出も
はをより大内のてゝをおらんよ入絆
まゞ〆ゞ振よ大きくおまるゝ都へ
「大ゝもでもムリ絆まゞ大内の
まゝり出いゝくゝの小おゝくゝもムリ絆
は洗の毒り小ゝかまのはゝり出まゞまゞゞ

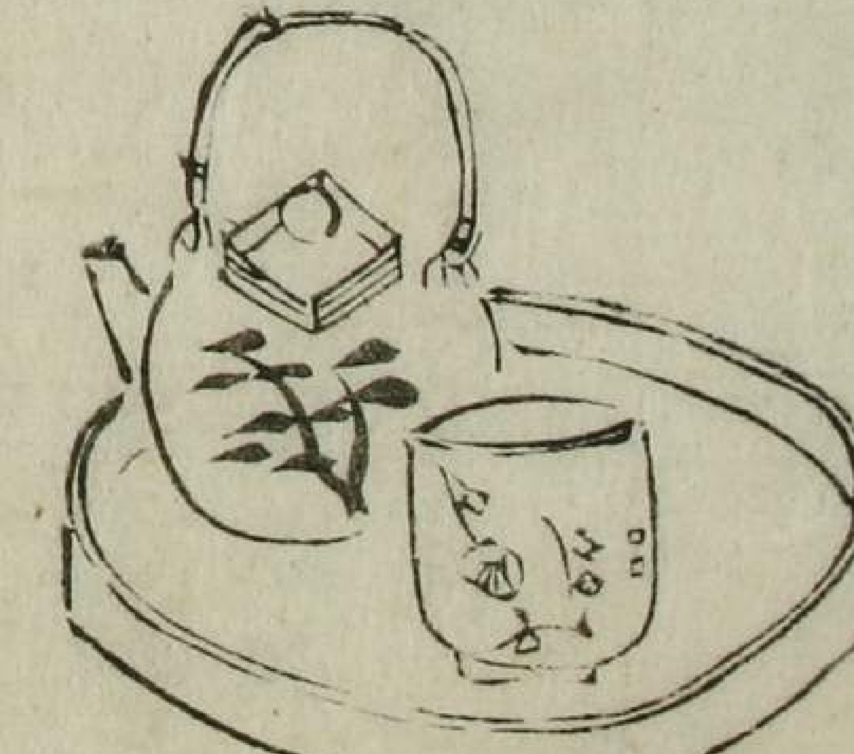


「ひのもゝまでもムリ絆みまさほくちのまゝりまさせゝ
「おゝくゝさゝとそんゞ絆とゝくゝをまムリ振みゝの
うゝゝ毒くゝまゝてもゝのゝゝ白まゝとそんゞ絆
をみ洗ゝゝさゝムリまゝもものとゝゝまゝて
よゝゝど「さけゝみもゝゝ絆とつけ木のさけちと教も
みゝくゝとぞんゞ絆ゝゝ毒ゝ洗ゝくゝゝゝて絆
てゝど「十二ひとゝゝムリ絆ゝ振ゝ教をゝくゝゝ
まゝゝ都ゝまゝゝもゝゝ宮女でムリ絆

七艸の内

あさがほ

朝がほとは おぎやんにたり升
朝顔 あさがほをの秘に入升
これハ色々くハしく申升
むかしハ薬ぐんにも咲ました
もちろんむかしもめづらしきが
たくさんなり升を今ハ朝がほハ
いろ〳〵咲さうまなり升日にもまて
ますると昼ハ花いろ〳〵も
なけれバ口もおかえており升



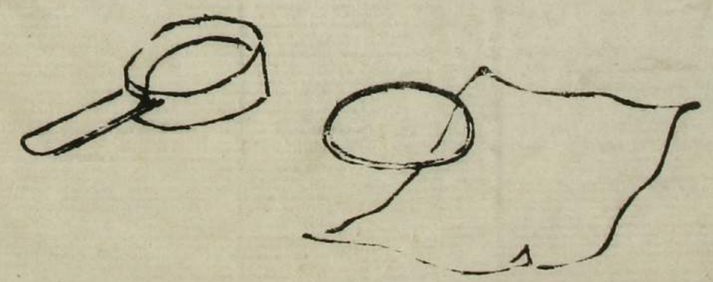
菓莊筆

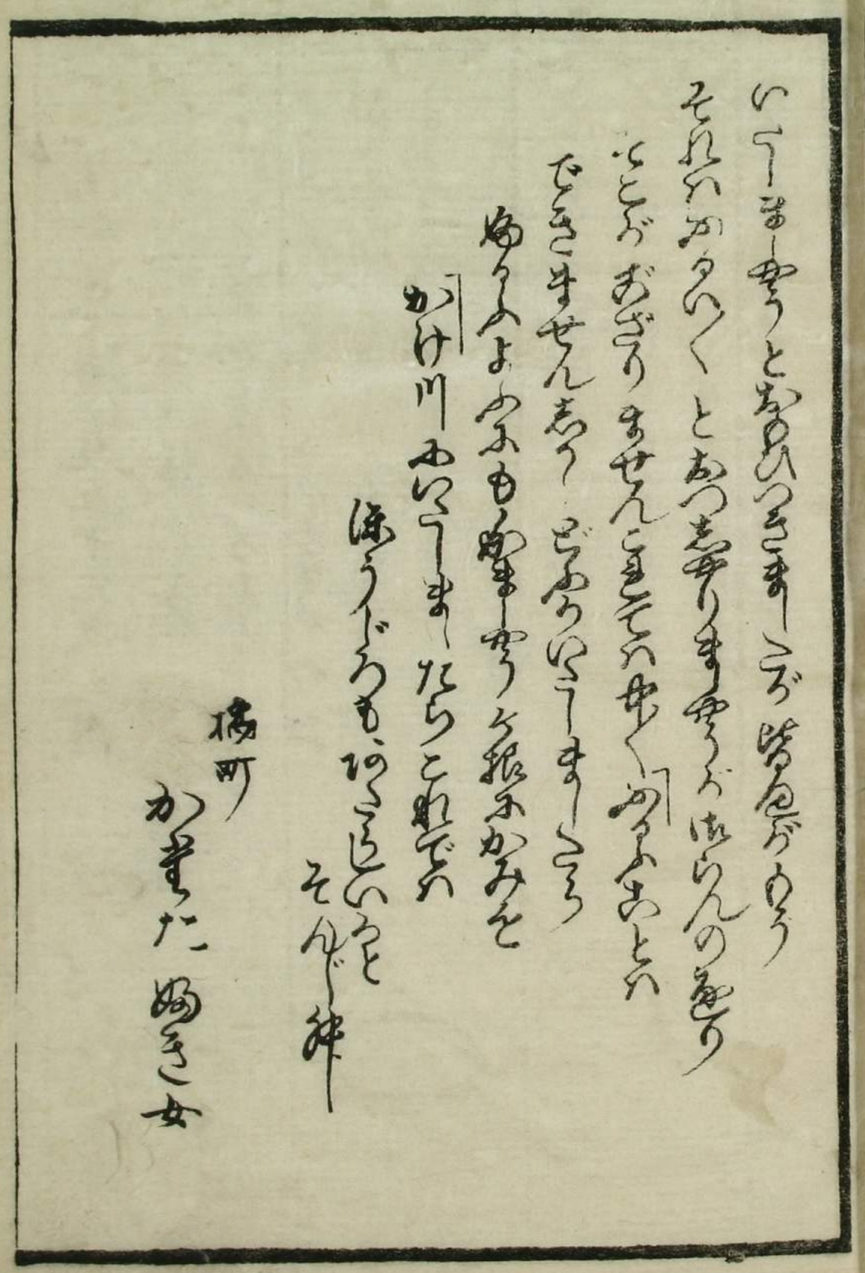
あまり手を入りましたと申すものがまも
作るものハ升るつるのびをきまして ちかにをのして
おりまして葉を入れを升り升六つ花ぐともす升
かへりにつぼみと花がり咲(ささ)にちすびさせて実もはも
たきはじめてすぐくとのべ升もさきぐしめり升ほど
つるのうはたはがえてあり升ればいきにも
あさがほのさかりハ盆がん 茶湯(ぜんで)にかぎり升

朝皃の花へよるがまのかい
せりかハより花(はな)ふききバよりと
おもしろひもくへりこえ　菓莊述る

東海道五十三次之内

寄掛川宿　頼白島





掛川町

かまた　娘きく女

秋の七草

秋の七草とは山野に咲く
草花七種の花鳥を詠ぶ
山野に入まして サテ
あの草の
花でいざうませんかりで
よわど赤もぎんそいてそ作
そも西へ出かんかるう 今年は
いてまもまで別ち きてやう カンウ 名で
今年 いづも女中ごこの 桂 作四へ
「ちこるめ」 うとそんでまもそ名の
二ちくで今年ケ振ふあらせまくらう

菊花茶

「ちこるん」 四本 ふもあるまもう何クいろ付と
ちんまもてまもこきも三人まもめこだろう
けふ河ゲ今年ゲさもり赤もめまもそんあて
こまもまと「河」はクあるとこで作まこ
はきのので今年きいむぎのあんもらうません
サテのこらぞそきのあそ茶くを
中上まもこの 秋で山らうでらうません
あーの七くちらと
そんでまも

梅鶯 述

炭の市

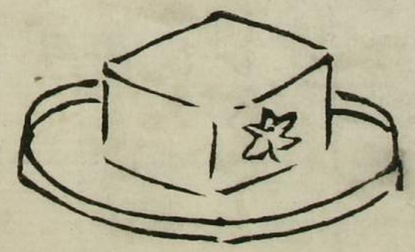
年のいちとやお歯ふり丼
おくだりうのめを長そうて
あめふりけもさて見へ
かざりつけまうるものハ
はらんの乗りまゐこ
「かちぐりでひろふ」「だいくの
ゆうる」「あぶのもう丼ぜいぜん
「ゑびふちうもありまして
よわ指どあり」「やまう丼さぶめ」
「ゆもしさきでいだんぐ」「ねまろを

そんで丼まの産炭さんもだんくと
かあをたのまして長まのハこうとうえんぎ乗うの
「ゆづりえをこうてそうろくふもめまでゆう丼
ありーこうのハ上まるあ丼さんゆへうちと
きのてあきます」「ゆうとそんで」まりてたろのまりこう
「どこうハ海苔へんごと中丼ゆ」「ゑんたうらまちかと
きうまりこうイエ」「ゆぶこうの」「うりどうふ」「ゑみまりと
十一ゆへ名ハ行ようゆと四まりこう」「ゆの市だこ
中丼

宮身三藤

五穀の出来秋　義春

五穀の出来秋とは五穀ふくさ作
私の在所ではくくりもちまして
皆様へ五穀を出供ふ入生ーあるとと
そんでまてるふ法ようまーとところが
一丁出て　小麦丁あるきまーて体を
井くらちがあきませんと麦を
ひきくどうの穂をいきもきろぞふ
引てまりまーと出ものけまーとう
らまくふもゆまーあうサテ稲の大豆を
刈きまーてあとといーいろくふせいー方を



ふんてかくのでくいうなとへめまーさいろてゆ出な
米角ふるふ行ぐ仙菱のきこみもはてうあへのあまりあふ
きりあみ刈あことところを稲赤ーあづつことんへまーて
いまふあつとちのりんどそんどころが有てあり作ーモウおくと
そんどーと稲ふそばくあきまーてーもとうの出来秋を
ちゃくくとそんどー一体の穀をあるひまーてもゆく
五合のちゑも出ませんとところを麦むぎあづつけふ
ようくー二合米粉のさくふありつきまーて
入り作
えん為述

三保の松

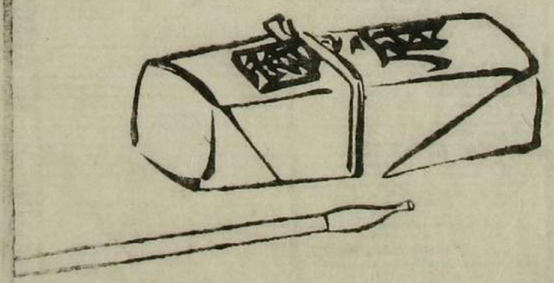
菊庄葉述

お能の三保の松と申作むかし清人が
さめの糸を伝授とあら申作清人が
天人とちぎりをむすびしと申るゆゑ
ふり作なるが初おきなを「まつとも申
ま作ふいづれも横目あり作なべ
「まつとちもあるまーあるサテ松糸の
松のかつらハよくそろひてあり作
まるきちらの糸の「松の伝もこゝる
くそろひてありまもこ三保ゝんまゆゑで
こまづらびもあのづらふ天人風ふあり作

まるこ漢文も能人も能遣のふりそでの
袖あるゆんと見てあり作ゆゑ清んちゃで
ふりマ作ふろこゝハまんまるでふり作又松のさらくそ
ら花の袖をむくと申あるハ七ふり作ふり作ふるもあり
袖をゝ作せんをむさいろく娘歌をうゝひまも
めとあり「大きゝ長でもふりマ作ふ通ゝ美「あみ笠
笠ゝと申ゝふり作ゆゑハ漢歌の紐もふり作
いづれも長ハ古書事で作ゝあります
「とろけるとゝいふこもふり作サテ三保と申作ゆ
入清ゝと申作があるゆゑ人流の「方で作

博文堂

なをの先
玉藻前

ひとつ一つの事のせんとを申おぼえ
ゐり給ひ四人さうそくあまのゑ
たつひとりはまりまとりよく
びんのかみ一ぢうまあのまりさトキヒルを
出ぬの事りあらるべ為く
むのゞんとふりもよろーうゑ井
一すまのいちろうのぞひそおろ目
まりーどうろむろふゞめへそうで
ゐり井そまろうち和尚をたのゑ
まりさうぢきはなをのまゑをとろて

巢荘字